



vol. 117

千葉市美術館ニュース 「C'n」(シーン) 117号

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

✕ ccma_jp @ccma_jp

〔編集・発行〕千葉市美術館
〒260-0013 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
https://www.ccma-net.jp/
〔発行日〕2025年7月15日
〔印刷〕株式会社 エイチケイ グラフィックス



杉本博司《Tyrrhenian Sea, Conca》1994年 千葉市美術館蔵 ©Hiroshi Sugimoto / Courtesy of Gallery Koyanagi

館長のつれづれコレクション案内

西洋的視覚への懷疑



©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates, Tokyo, Pace Gallery, New York and Stephen Friedman Gallery, London.

高松次郎 「赤ん坊の影 No.387」

1974年 キャンバス・アクリル絵具 182.0×228.0cm

白いキャンパスの上に赤ちゃんの影が描かれています。

この作品は1964年に高松次郎(1936–1998)が描き始めた「影シリーズ」の中の一点。このシリーズの始まりについて高松は、「本当に純粹な絵画というものは、“キャンバスがキャンバス自身を表現する”ということではないのだろうか」と考えて模索していた時、キャンバスに映る自分の影を見て閃いたと記しています〔註1〕。影

は光源や光を遮るものの移動に伴って投影される場所や形を変えていくもの。描かれた影は一過性や可変性を想起させ、キャンバスの存在が際立つという目論見があったのでしょう。

高松は「ただ白だけのキャンバスという実在が、何か表現されたり意味づけられたりしないそのままで、それだけで十分に魅力的である」ということ、それを証明したいという考えがありました〔註2〕とも述べていて、物自体を尊重し、人

との関係を探ろうとする「もの派」と呼ばれる姿勢が感じられます。

さらにこの作品は、西洋絵画を学んできた日本絵画の歴史に対して様々な問題提起を試みている点で注目されます。

ひとつには、この作品は、キャンバス面よりも鑑賞者側に赤ん坊がいて、それより遠い所に光源があり、影がキャンバスに映っている状況を想起させること。西洋のルネサンス以降の絵画は窓のように世界を切り取り、絵画平面の奥へ広がる世界へと導くものでした。この作品では、表現する世界と絵画表面の関係が西洋絵画と逆になっているのです。

しかも、鑑賞者の側に、影の主である赤ん坊はいません。西洋絵画は陰影法を用いて、絵画表面の奥に立体があることを表し、鑑賞者を虚構の三次元空間へといざないました。もとより絵画は虚構を表す平面ですが、この作品は鑑賞者が虚構の世界にとどまることを許さず、影のリアリティと、絵画の虚構性を同時に体感するしくみになっています。

そして、そうした体感を得る鑑賞者の視覚が、いかに西洋の絵画技法に親しんでいるかを認識させる点が、日本絵画史におけるこの作品の位置として重要です。18世紀に陰影法を用いた西洋の肖像画を見た日本人は、陰影表現の部分を^{あざ}痣と認識したと言われます。そうした視覚の持ち主であれば、壁に映った影絵を実在と認識して恐れる幼児のように、この作品

に描かれたモチーフを何か不思議なものと認識することでしょう。西洋絵画の技法に親しんだ視覚を持つからこそ、キャンバスに描かれた影からこちら側にいる赤ん坊を想起するのです。

日本人が西洋絵画の技法に親しむ動きは、再現描写に有用性を見出した平賀源内(1728–80)や彼に師事した絵師たちなどによって広められ、浮世絵などにも用いられるようになっていきました。明治以降、西洋美術が本格的に受容され、日本人の視覚は西洋の遠近法や陰影法などに親しみ、西洋絵画を違和感なく鑑賞できるようになりました。

日本の1945年以降の美術には、ある意味で、幕末から続いていた日本美術の未完の近代化を追いつくようとする流れと、第二次世界大戦以前の動きを懷疑的にとらえ、新たな試みを模索する流れとが併存していたと言えるでしょう。高松は後者の側で先鋭的な提案を続けた作家でした。「影シリーズ」は、キャンバスという西洋由来のものを支持体という位置から解放するために影を描き、それによって従来からある絵画を新たに展開させ、先に述べた革新性を得ている点で、知的反逆者高松次郎をよく表しています。

〔註1〕「自分を無にすること」1980年5月(高松次郎『不在への問い』水声社 2003年)

〔註2〕「『影』のシリーズについて いまの時点から」1987年6月(高松次郎『不在への問い』前掲)

〔館長 山梨絵美子〕

未来

開館30周年記念

30th Anniversary of the Museum's Opening
Recorded Futures Relived:
CCMA's and Contemporary Art

千葉市美術館と現代美術

追想



【図1】吉澤美香《ほ-82》1992年 千葉市美術館蔵 ©Mika Yoshizawa



【図2】辰野登恵子《Work 89-P-13》1989年
千葉市美術館蔵

担当学芸員インタビュー

2025年は千葉市美術館開館30周年イヤー。8月2日からは、当館の現代美術コレクションを
展覧する「未来／追想 千葉市美術館と現代美術」が始まります。展覧会の具体的な内容や
見どころ、そして多様な体験ができる関連イベントなどについてご紹介します。

【話し手:学芸員 森啓輔／聞き手:学芸員 庄子真汀】

——5月末から7月末までは、当館の浮世絵コレクションや近代・近世の絵画コレクションを紹介する展覧会が開かれていました。つぎは現代美術コレクション展です。

本展は、2025年に開催する開館30周年記念事業のうち、現代美術に関する展覧会です。当館のコレクションは、収集方針に沿って近世、近代、現代と幅広く収集されていますが、開館30周年記念事業では、これらのコレクションを活用する方針のもと、1年間を通して展覧会が計画されています。現代美術展もコレクションを中心に、現代美術を担当するグループで議論し、展示構成の検討が進められてきました。

——展覧会タイトルは「未来／追想」となっていますが、これにはどんな意味や思いが込められていますか。

他の開館30周年記念展とも共通する点なのですが、本展には、現代美術のコレクションを見せるだけではなく、30年間の美術館の活動を振り返ったり、活動自体を展覧会のなかで紹介したりする目的があります。そのため、「追想」には戦後の日本美術史と、美術館の歴史という2つの過去を振り返るという意味が込められています。展覧会に向け、当館の成り立ちについては、開館に携わった方々に当時の話を伺ったり、過去の資料を調査していましたが、その中の資料のひとつに1989年の「千葉市立美術館構想」というものがあります。

——どういったことが書かれているのでしょうか。

千葉市美術館がどのような基本方針でつくられ、どういった作品を収集していくかということが示されています。美術館建設について議論された時期が、千葉市の政令指定都市への移行のタイミングであったことから、21世紀に向けて市が発展し、国際化していく状況のなかで、市とともに成長する美術館であることが目指されていました。とくに「現代から未来を指向していく」という文言は、開館から30年が経った今、市民の文化芸術の拠点としての美術館のこれからについて考えるための指針になると思います、「未来」という言葉も展覧会タイトルに加えられました。

——そうして始められた千葉市美術館の作品収集によって、国内外から見ても非常に豊かなコレクションとなっているように思われます。

現代美術作品の本格的な収集活動は1991年から開始され、90年代に主要なコレクションが形成されていった経緯があります。当時の館長、学芸員をはじめとする美術館の方々の尽力によって、2025年の現在から振り返っても、美術作品として価値が高いものが多く収蔵されていると感じます。とくに、具体美術協会や実験工房といった前衛芸術のグループでまとまって作品を収集していたり、一人の作家に対して時代や分野、メディアをまたぐ複数の作品を収集していたりするという特徴があります。本展では、草間彌生氏や河原温氏、中西夏之氏の作品など、作家ごとにまとまった作品が見られるような展示構成によって、個々の活動も追うことができると考えています。

——コレクションの厚みが感じられる展示構成、とても楽しみです。ほかにも展覧会の見どころがありましたら教えてください。

展示室のスペースの制約はありますが、できるだけ多くの作家や作品を見ていただきたいという思いもあります。開館30周年記念事業ということで、これまでの美術館の活動を振り返るといった特徴がありますので、過去に開催された個展やグループ展を一部再現するような展示も考えています。当館では、これまで現代美術に関連する展覧会が120以上おこなわれているのですが、1997年の「超克するかたち 彫刻と立体」でさや堂ホールに展示された作品を、本展でも再現展示する予定です。

超克するかたち 彫刻と立体

1997年3月19日～4月24日



「超克するかたち 彫刻と立体」展は、ともに三次元の空間のなかに展開する造形でありながら、「彫刻」「立体」と呼ばれる、そのちがいはなにかというところから

考えた展覧会でした。出品作家は斎藤義重、土谷武、村岡三郎、福嶋敬恭、菅木志雄、小清水漸、八木正の7人。このなかで八木氏は当時すでに亡くなっていましたが、その後、斎藤、土谷、村岡の各氏がお亡くなりになりました。作品のあらわれは違いますが、みな自分のことばで考えていた方々であると、この二、三年思い返すことがあります。

【上席学芸員:薬科英也】

そのほかにも、河口龍夫氏や杉本博司氏【表紙】、高松次郎氏などの過去の個展で取り上げた作家や、2020年の拡張リニューアルオープンでできた常設展示室で特集展示をおこなった吉澤美香氏【図1】や辰野登恵子【図2】といった作家もぜひ紹介したいと思っています。また、2019年の「目 [mé] 非常にはっきりとわからない」や今年の「Nerhol 水平線を捲る」など、若いアーティストたちの公立美術館で初めての大規模な個展が当館でおこなわれ、高い関心をもって来場者の方々にご覧いただきました。さらに、2021年には千葉市で「千の葉の芸術祭」が開かれ、その一環でおこなわれた「CHIBA FOTO」という写真芸術祭の出品作をまとめて収蔵しており、そういった現在の表現も紹介できたらと考えています。



「目 [mé] 非常にはっきりとわからない」展示風景 2019年
撮影:Max Pinkers



「Nerhol 水平線を捲る」展示風景 2024年 撮影:市川靖史

過去の展覧会については、ポスターやチラシ、図録といった印刷物が残されていますし、展示風景は写真や映像といった記録がありますので、そういったアーカイブに触れるスペースを会場に設けることで、美術館の活動をご覧いただきたいと思っています。

——本展では、作品鑑賞だけでなく、さまざまな角度から現代美術を楽しむ仕掛けが用意されていると聞きました。

2020年の拡張リニューアルオープンで、常設展示室や子どもアトリエといった新たなスペースができてから、5年が経ちました。そのなかで、企画展だけではなく、常設展や教育普及プロ

グラム、あるいはショップやレストランの利用など、これまで以上にさまざまな体験ができる施設になってきていると感じます。そういった当館の新たな試みや現代社会での美術館に求められる役割をふまえ、展覧会でもコレクションを多様に知る体験型プロジェクトをおこない、より豊かな鑑賞体験が実現できればと考えています。

——たとえばどういったことができるのでしょうか。

夏休みに重なる時期でもあるので、親子で楽しんでいただけるような工夫をしています。会期中、漫画家の西島大介さんに制作いただいた、仮想都市「チバシティ」を探索する美術館オリジナルのゲーム【図3】が遊べたり、アーティスト・コレクティブのSabbatical Company（サバティカル・カンパニー）さんが手がけたピクニックのひとときのような空間で、当館のアーカイブに触れることができたりします。美術館のコレクションは、これからも展示され、来場者の方々がまた作品に出会う可能性があるといえます。今回の展覧会で、これまでに見た作品と再会される方もいれば、現代美術に初めて触れる方もいらっしゃるかもしれません。コレクションを通して様々な体験が生まれる展覧会を目指して、準備を進めています。



【図3】西島大介「さいばあばんく:千葉市美術館」ゲーム画面
※画像はイメージです

開館30周年記念
未来／追想 千葉市美術館と現代美術
会 期 2025年8月2日[土]～10月19日[日]
会 場 8・7階 企画展示室
休室日 月曜日(祝日の場合は翌平日)
詳細はホームページよりご覧ください





夏休みは千葉市美術館へ!

今年の夏もイベントがもりだくさん! 涼しい美術館で楽しく過ごしませんか?

びブラリでアサカツ!



4階の図書室「び
じゅつライブラリ
ー」に、夏休みの
朝限定で自由に
活動できるスペ
ースを用意しました。

7月23日(水)～8月22日(金)の平日10:00～12:00/4階 図書
室にて/対象:小・中学生 ※小学校低学年以下は保護者同
伴/参加方法:直接会場にお越しください/参加費:無料

さいばあぱんく:千葉市美術館



漫画家、芸術家として活躍する西島大介さんの千葉市美
術館オリジナルゲームが体験できます。

8月2日(土)～31日(日)/1階 多目的室にて/対象:どなた
でも/参加方法:会場にて随時受付/参加費:無料
※混雑状況によりお待ちいただく場合がございます。

NFT デジタルスタンプラリー



美術館内をめぐって、
西島大介さんによるオ
リジナルゲームキャ
クターを集めよう。
4つのデジタルスタ
ンプを集めてコンプ
リー特典をゲット!

8月2日(土)～31日(日)/館内各所にて/対象:どなたでも
/参加方法:会場にて随時受付/参加費:無料
※一部要覧会チケット(高校生以下無料)、要スマートフォン
/定員:(1ヶ所あたり)先着1,500名

親子で作ろう! アートなステンドグラスの星



展示室の作品から受け取ったイ
ンスピレーションを活かしながら
二人で協力し、アートなステンド
グラスの星を作ろう!

(A)8月3日(日)10:30～15:00、
(B)8月17日(日)13:00～16:30
※両日とも同内容/5階 ワーク
ショップルーム、8・7階 企画展示室にて/講師:鶴澤直美
(UZAWA STAINED GLASS /ステンドグラス作家)/
対象:小学3年生～中学生とその保護者のペア

参加方法などの詳細と申込はこちら



おしゃべりアート探検 ～みんなで観よう現代アート～



美術館ボランティア
スタッフと一緒に、
おしゃべりしながら
展覧会を鑑賞して
いきます。どなたで
もお気軽にご参加
ください。

2023年度の様子

8月22日(金)～24日(日) 10:30～12:00・13:00～15:00
※所要時間30分程度/8・7階 企画展示室にて/対象:ど
なたでも ※小学2年生以下は要保護者同伴/参加方法:
当日先着(8階ロビーにて随時受付)/参加費:無料
※要覧会チケット(高校生以下無料)/定員:1日10組程
度(1グループ5名以内)

夏の似顔絵アトリエ



夏休みに合わせて1日限定の似顔絵
ミニブースが出現します!手描きなら
では魅力がつまった似顔絵を、こ
の夏の記念にぜひ一枚お持ち帰りく
ださい。

8月24日(日)10:30～15:30/4階 市民アトリエ2にて/対
象:どなたでも ※1組につき1枚まで/参加費:無料/定員:
先着20組 ※混雑状況によりお渡しに時間をいただきます。



「つくりかけラボ18」池田光宏 きっとこれも誰かの仕業」レポート

だれかの仕業が連なるその先に

6月11日よりスタートした、アーティスト・池田光宏さんによるつくりかけ
ラボ18。日常の見え方をおもしろく変えてくれる「誰かの仕業」が、光の
空間インスタレーションによって浮かび上がります。

まずはじっくり作品を見てみよう

入口から入って奥に進むと、そこは池田さんの実験的なスペ
ース。動く光が、壁面のドローイング作品を照らし、作品の表情
がごろごろと変化していきます。こんなにも変化して見えるの
は、光の仕業?それとも、絵の具の仕業?

また、「美術館」をテーマに新たに制作された映像作品もぜひ
お楽しみください。



↓光によって見え方がこんなに変わります



オープンワークショップ「ひかるカタチ」



池田さんから毎週出される
お題から連想されるかたち
をワークシートに記入したら、
そのかたちを蛍光色紙に切
り出し、ステージの上に置
いてみましょう。誰かのかたち

と重ねたり、並べたりすることで、自分のかたちがどんなふう
に見えるでしょうか? また、ステージに照射された光の色の変化
によって、どのように印象が変わりますか?

実はこんな仕掛けも

毎週変わるお題は、実は展示室の作品がモチーフとなってい
ます。実際の作品を見てみると、ことばの感じ方や、つくりたい
かたちが変化するかもしれません。ぜひ展示室の作品も見て
みてくださいね!



いつもとは少し違う視点で見てみることで、決まった意味からそっ
と離れてみることで、日常の中に思いがけない出会いや発見が
生まれる。そんなきっかけを、この空間のどこかに見つけてい
ただきながら、美術館という場所そのものが「誰かの仕業」
であふれていることに気づいていただけたら幸いです。

会期中はアーティストワークショップやトークイベントを開催予
定!詳細はホームページよりご確認ください。

つくりかけラボ18「池田光宏 きっとこれも誰かの仕業」
会 期 2025年6月11日[水]-9月28日[日]
会 場 4階 子どもアトリエ
休館日 第1・3月曜日(祝日の場合は翌平日)
詳細はホームページよりご覧ください





千葉市美術館開館30周年記念 歴代館長インタビュー ～二代館長 小林忠先生～

インタビューのフルサイズは動画で公開予定！



小林忠（こばやし・ただし）

1941年、東京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。東京国立博物館資料調査室長などを経て、学習院大学文学部哲学科教授に就任。並行して、1999年から2012年まで千葉市美術館の二代館長を務めた。その後も国際浮世絵学会会長などを務め、現・同協会名誉会長、学習院大学名誉教授。著書多数。

着任当時のこと

私は最初の浮世絵コレクションの収集がなされているとき、美術館のできる前から関わっていました。もともと学芸員育ちの私としては、大学で学生さんと一緒に勉強でき、美術館で一般の社会人の方々と関わりを持てる素晴らしい「二刀流」ということで、嬉しく着任したんですね。

印象に残っている展覧会

「青春の浮世絵師 鈴木春信」展（2002年）



私は学生の頃から鈴木春信という浮世絵師、錦絵を作った最初の人の展覧会をぜひやりたいと思っていた。私もアメリカ・ヨーロッパでの作品調査に学芸員とともに行かせてもらって、贅沢な展覧会をさせてもらった。これがもう大変ありがたいものとして記憶に残ります。

美術館への作品寄贈・寄託について

美術館にとって、美術館の友達、「館友」というものを大切に育てていくためには、美術館が歴史を踏むにつれて豊かになっていかなきゃいけない。私は東京国立博物館の学芸員をあわせて10年ちよつとやってきたのですが、寄託品あるいは寄贈品も豊かなコレクションを形成しているんですね。千葉市美術館も30年の間に、館の友達、支援者の方々が美術館に作品を預けてくれることがありますよね。多くの方々から寄託を受け、あるいは寄贈を受ける。美術館の財産なんですよね。これからも県民、市民と一緒に公立美術館として育っていったほしいなと思いますね。

寄贈品・寄託品に関連したコレクション展も開催してきました

左：「寄贈・寄託作品展」（2012年2月4日～26日）にあわせて刊行された「嬉遊会コレクション—江戸絵画を中心に—」図録
右：「江戸絵画縦横無尽！滴水軒コレクション名品展」（2024年6月28日～8月25日）図録



千葉市美術館のコレクションについて

渡辺崋山《佐藤一斎像画稿 第三～第七》文政4年(1821)頃



日本人は、完成作品を見せて、いわゆる下絵とか草稿を見せたらないんですね。だからあまり残ってない。ところが崋山さんはそこにも非常な熱意を——もう幕末の頃だから、彼は西洋学を極めた人なので、近代的な個性を持っています。出来上がるまでの過程が大事なんだということを書いて残してくださったんだと思うんですね。この画稿が5点も寄贈されたっていうのも本当に嬉しいですね。宝物ですよ、これ。

橋口五葉《髪梳ける女》大正9年（1920）



橋口五葉さんは、鈴木春信が好きだったんですね。春信の（描いた）お嬢さんが近代になったらこういうお嬢さんになったんだろうなと思うような、非常に清楚で清潔で知的で——うっとりしますね。

もし1点千葉市美術館のコレクションを私蔵できるとしたら？

ご褒美にあげると言ってくれたら、私は浦上玉堂の《雨褪臙脂図》。今自宅にかけている作品をおろして、一人だけの展覧会をしたいなと思います。

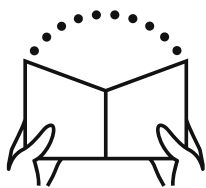


浦上玉堂《雨褪臙脂図》文化期（1804～18）前半

千葉市美術館の活動について

千葉市美術館は、海外との接点をずっと骨太にしてきていて、広い年代の古代から現代に至るまでの展覧会を開いてきた。そういう国際性っていうものを生かして、首都圏の衛星都市というような引っ込み方じゃなくて、今後もどんどん外へ飛び出していったほしいな。そして、友好的な関係を海外の美術館とも結んで。それから国内の美術館、各地域の美術館とも連携してきた歴史があるので、これからも千葉市のコレクション、美術館のコレクションをどんどん貸し出して、各地の公立、私立の美術館との親しい交わりを続けて欲しいなと思います。

〔取材日：2025年3月2日〕



びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.15 千葉市美術館の現代美術展を振り返ってみよう！

『Tranquility—静謐』 1996年刊



開館記念第2弾として開催された5人の現代美術家—ニエレ・トロ—、ミシェル・ヴェルジュ、マリア・ノルトマン、杉本博司、宮島達男—によるグループ展。本展をきっかけに収蔵された作品もあり、千葉市美術館における現代美術を印象づける展覧会となりました。

『超克するかたち 彫刻と立体』 1997年刊



所蔵作家を中心に構成され、1960年代後半以降の「彫刻」と「立体」の表現を紹介した本展では、多様な立体作品が展示されました。今回の「未来／追想」展では、さや堂ホールにて「超克するかたち」展の再現展示をおこないます。

『関係—河口龍夫』 1997年刊



現在も千葉県を拠点に活動する河口龍夫氏による個展。「未来／追想」展にも出品されている《陸と海》(1970/1992年)は、波打ち際に置いた板を連続撮影し時間の経過を捉えた26点組の写真作品で、氏の制作のコンセプトを示す重要な作品です。

『草月とその時代 1945-1970』 1998年刊



千葉市美術館では一般財団法人草月会からまとまった作品の寄託を受けており、コレクションの重要な一部となっています。いけばな草月流の創始者である勅使河原蒼風をはじめ、イサム・ノグチや清水九兵衛など作品は多岐にわたります。

『ミニマル マキシマル—ミニマルアートとその展開』 2001年刊



シンプルで幾何学的な形態を特徴とするミニマルアート。ドイツの美術館の協力のもと世界中から作品が集まり、国内ではじめてまとまって紹介する機会となりました。数は多くはありませんが、千葉市美術館の現代美術コレクションには海外作家も含まれています。

『瀧口修造とマルセル・デュシャン』 2011年刊



300点を超える作品と資料をととして瀧口修造とマルセル・デュシャンの交流を紹介した本展。現代美術を切り拓いたデュシャンと、それを日本に紹介した瀧口の制作や活動は、日本の現代美術の動向を示す重要なファクターです。